

# 研究通信

No.159  
1990年1月31日刊  
研究会局  
社会研究会  
事務局  
常磐大学人間科学部  
柄澤行雄  
310水戸市見和1-430-1  
TEL 0292-32-2511

## 第三十七回大会印象記

### 白川郷での村研大会

笹原恵

白川郷に足を踏み入れたのはあたりがすっかり暗くなつた後であつたので、大会当日の朝、冷たくびんとはりつめた空氣の中で合掌造りの家々と対面することとなつた。大家族制を表現している茅葺きの家々と美しい自然にあふれた白川郷の雰囲気につつまれて、「村落」研究に携わる人々が村の公民館にひとりまたひとりと入っていく風景。村落が生きづいている地での学会は、通常「村落」に頭をめぐらす学会とは違つた緊張感がみなぎつており、毎年村研が各地の農村で開かれる意義をいまさらながら確認させられた。同時に、先日家族問題研究会によつて出された小山隆先生の「山間聚落の大家族」を読んでくればまた違つた感慨があつたであろうことが頭をよぎり、先達の業績をふまえるべしといひいましめの意味をも感じたのであつた。

さて、大会では七本の自由報告と三本の課題報告がなされたが、莫大な資料と多くの議論は私にとって容易に消化できるものではなかつた。しかし、自分なりに課題を整理をするという意味で課題報告をまとめてみることにしたい。

さて、本年の課題報告は「農村社会編成の論理と展開——転換期の家と農業経営」と題され、三本の報告がなされた。昨年と同じ論題でありながらも、焦点が昨年の「家と村落」から「家と農業経営」に移されており、発表の中心はどちらかといふと個々の農家経営の問題におかれた。

徳野報告（第一報告）は、今後農業の主体となりうる農民を「農業を単に経済的行為としてのみ位置づけず、農業のもつ総体的機能を自己内部に掘り下げながら、農業宮為のアイデンティティを確立している農民」ととらえ、その事例を個別農家、集団農場、農協の3つのレベルにおいて一特に前者二つを中心にして一報告した。氏は、この農民の特徴の一つをその活動領域（非農業者、都市、異業種団体などの、非農業的領域）ととらえ、農民たちがそこにおいて

得た情報・流通のネットワークをもとに農業経営を開拓し、現在の農業情勢への対応へと結び付けているとの指摘を行なった。事例としては個人では福岡県桂川町の古野隆雄氏、集団では山口県阿東町の船方総合農場がとりあげられたが、そのどちらもが農業危機に対して積極的に攻めの姿勢に転じている農民像を示した。これは農民の兼業化をもはや常識的にとらえがちな私にとっては非常に刺激的な「農民像」であったが、今日の農業問題の解決を農民個人の資質に任せてしまう危険性を胎んでいる論議のようにも映つた。無論農民の「主体性」の問題が重要であるのは重々承知しているが。

徳野報告に対し、松村・青木報告（第三報告）は同じく積極的に攻めに転じながらも混迷を深めつつある有機農業運動の地域的展開を山形県高畠町の有機農業研究会を事例に報告した。両氏は膨大な資料を駆使することにより15年にわたる運動の推移を辿り、それをかたちづくってきた様々な要因——減反政策をバックグラウンドにした青年の学習活動・運動のリーダーたちの理念、農民自身の運動実践の意図——を分析したが、その中で運動が内外で直面する多くの問題点が指摘された。特に農業空中散布問題をめぐっては、「運

動実践者としての農民」対「地域農民」という農家どうしの対立が生じており、地域における運動の位置が改めて浮き彫りにされたという感じであった。それは、農薬散布を事業として進めてきた農協との対立というよりも、有機農業の影の部分である苛酷な農業労働すなわち「除草」に苦しみつつも運動を続ける農民とその苛酷さを解決してくれるという意味では「救世主」である農薬にすがる農民との対立というように思えた。安全食品、環境保全を掲げる、あるいは戦略としての「有機」を掲げる農民と苛酷な農業労働から逃れ、

省力化を図る農民、どちらかに分があるのか答えはなかなか見つからないように思えた。

これら二つの報告が農民の主体性並びにその連帶、地域との関係への着眼であったのに対し、奥山報告（第二報告）は、主体的な農業の担い手というよりも、若手層の流出の進む農村に残され、そこでの生活を余儀なくされている高齢者およびその家族の生活を既存の資料を使って紹介した。換言するなら、今後の担い手のいない、いわば守りにつくこともできないまま「消えていく農村」の姿を描き同した。そこには自ら事態の打開もできずに、何らかの施策を待つしかない高齢者の集合体としての「高齢化社会」の縮図が描かれていたように感じられた。積極的に農業に取り組む農民のいる農村の風景とは対局にあるとはいいうものの、これも今日の農村風景であることは確かである。

この農村の分極化を表わすように、後になされた共同討議も相互に関連しながらも積極的な農業の担い手としての農民に関するものと、衰退して行く農村に関するものというように二点に分かれることになった。

前者に属する議論としては、まず主体的な農民の組織化、農民運動の問題が取り上げられた。始めに布施鉄治氏から有機農業運動の地域への影響が問われ、青木氏からは部分的な影響にとどまるとの回答がなされた。また、別の文脈ではあったが徳野氏もこの点にふれ、事例としてとりあげた船方農場がいわば主体性のある人間を集め団化している強みによって地域への影響力を強くもつているとの言明があった。布施氏は課題として、都市型の消費者運動の農村への持ち込みであったこの運動がどのように展開していくのか、援農と

いうような形で消費者を労働に組み込んでいく新しい関係がまた伝統的社会関係をも両立させていくものなのか、また運動の現状をふまえた上でそれを理論にどのようにフィードバックさせていくのかを掲げた。このような運動の展開が、点にとどまるのかそれとも面へとなりうるのかといった議論は農民の主体性の問題と結びつけられ、たびたび話題にのぼったが、その際にあげられる「農民の価値転換」ということの曖昧さも手伝い、議論はなかなか進展しなかった。

この過程で松田氏からこのような農民運動を可能にしている条件についてもう一度考え方ではないかという提案があり、特にその条件の一つである家族の問題があげられ、論題は家族に移った。松田氏はその例として、報告者の徳野氏の発言——事例でとりあげた農民が非常にうまく家族を生かしている——と細谷氏の発言——農民の直系家族における世代の重層化を指摘し、むしろ核家族連合と呼ぶべきものではないかと家族の変容を指摘した——をとりあげ、諸氏に意見を求めた。これに対し様々な意見が出されたが、大会一日目に現在話題を集めている秋田県大潟村の米作農民についての貴重な報告を行なった岩本由輝氏からは、農業経営の主体としての家族を「農業労働組織としての家」としてとらえてはどうかという提案がなされた。「家」という問題の複雑さが伴つてなかなか議論が発展しなかつたが、これに関して、次に述べる大川氏、大野氏らの集落論（村落論）が興味深かった。

これは議論としては後者——「衰退していく農村」という点——に属する問題といえようが、大川氏は経営体としての家族を「収入源になりうるもの全てやっていくことによって生活を維持する」

と表現し、個々の農家の問題が必ずしも農業振興論につながるわけではないとの指摘をしたうえで、そのような性格をもつ経済単位としての各農家の自立がなければ集落は消滅していくであろうと述べた。大野氏もこの点を「地域経済力の顕在化の努力」として論じ、流通機構まで含めた地域産業の見直しを提唱した。このあたりは、徳野氏が農民の農業危機への対応の中で述べた「非農業領域」との関連ともつながりうる議論であるように思えた。この観点をもたない集落振興論や福祉サービスはある意味で「時間稼ぎ」に過ぎないという論議があつたが、うなづかざるをえない。少なくとも根本的解決の道は開けないだろう。

さまざまな課題が混沌としているまま、そして自分なりの整理もできないでいるうちに、大会の終了時になってしまった。正直言つて不勉強の恥ずかしさと悔しさが残った。そして、得体の知れぬものと格闘しているようなもどかしさと。しかしながら、あのどぶろく祭りの活気——祭りそのものばかりでなく、参加した村研のメンバーの活気も（！）——とその夜に観た獅子舞いの見事さが心に甦り、少し元気が出て来るようだ。悲しげな旋律を奏でる笛の音は今でも耳に残り、色が舞うとでもいうのか鮮やかな色の獅子の舞いが目に焼き付いている。あの文化を生み出してきた、続けてきた農村は家はどうなってしまうのか、回りにいた村落研究者たちがそれぞれ何を感じながらあの風景に酔っていたのか。初めて参加した村研大会は非常に多くの課題と共に印象的ないくつかの風景をも残してくれた。お骨折り下さった大会関係者の方々、報告者の方々に心から感謝を申し上げたい。また、この拙い印象記にお付き合い下さった方々にも。今後ともどうぞよろしくお願い致します。